

## メディアとしての白蓮事件 —— 事件報道と「鳳凰天に搏つ」をめぐって

笹尾 佳代

### 1. はじめに

1921年10月22日、『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』の両朝刊紙上には、大々的に一つの事件が報じられた。九州福岡の炭坑王と呼ばれた伊藤伝右衛門の妻<sup>あき</sup>燐子・歌人柳原白蓮の失踪である。

親子ほども歳の離れた炭坑王と華族の令嬢の結婚は、当初から注目を集めていたが、10年が経過した1921年10月20日、燐子が7歳年下の恋人・宮崎龍介の元へと走るという結末を迎える。出来事のスキャンダル性に加えて人々を驚かせたのは、燐子が伝右衛門に宛てた最後の手紙の全文が、同日発行の両『朝日新聞』夕刊誌上(以下、両紙に掲載された記事の場合は単に『朝日新聞』と示す)に掲載されたことであった。当の伝右衛門に届く以前の「絶縁状」の公開は大きな波紋を呼ぶ。その後の報道が多くの人々を巻き込んだ「劇場型恋愛ニュース」<sup>1</sup>の様相を呈したように、「白蓮事件」は、まさにメディアが引き起こした事件でもあった。

事件をめぐる膨大な報道記事は、永畑道子『恋の華・白蓮事件』(新評論社、1982.11)において捉えなおされたといつてよい。永畑は、関係者のインタビューを交えながら報道記事の内容を相対化した。それに対して、龍介と燐子の間に取り交わされた700通にも及ぶ書簡を精査し、事件を物語形式で綴ったのは林真理子『白蓮れんれん』(中央公論社、1998.10)であった。こうした著書は、事後的な視点から事件の経緯と人々の心境を整理することによって、事件の〈真相〉に迫るものである<sup>2</sup>。

それに対して本論で注目してみたいのは、「白蓮事件」をめぐる同時代報道の混沌としたあり様そのものである。事件の報道は、その行為の最中において、出来事に意味を与えていく。この時、白蓮事件を形作った報道言説は、どのような特質を持っていたのだろうか。この磁場の元にはどのような言説が引き寄せられていたのだろうか。本論では、いわばノイズをも含み持った同時代の言説そのものを検討してみたい。

その上で留意したいのは、その後の白蓮による創作の位相である。事件から2年半が過ぎようとしていた1924年3月、白蓮は『女性改造』誌上に「鳳凰天に搏つ」を発表した。事件以前に歌人として名を上げていた白蓮の復帰第一作は

1

山本晃一「劇場型」恋愛ニュース—白蓮事件の報道ぶり」(宮崎蒔苳監修『白蓮 気高く、純粋に。時代を翔けた愛の生涯』河出書房新社、2014.8)

2

その他の著書としては、井上洋子による伝記『柳原白蓮』(西日本新聞社、2011.10)、宮崎蒔苳『娘が語る白蓮』(河出書房新社、2014.8)などがある。

3

白蓮の小説について言及したものは少ない。菅聡子「柳原白蓮の〈昭和〉」(『お茶の水女子大学人文科学研究』2009.3)では、国策小説『民族のともしび』(奥川書房、1943.2)について論じられている。野々山三枝「白蓮の小説・詩・戯曲」(『短歌』1992.3)には、白蓮の小説が紹介されているが、網羅されたものではない。

4

当時、夕刊の日付は1日先取りしていたので、10月23日付の『朝日新聞』夕刊紙上に、「良人伝右衛門氏に送った燐子の絶縁状の全文 愛なき結婚と夫の無理解が生んだ妻の苦痛と悲惨の告白」と題して掲載された。

5

原田譲二「銅御殿の白蓮脱走」(『芸芸春秋・臨時増刊号』1955.10)。宮崎龍介と親交のあった早坂二郎、中川敏夫が大阪朝日新聞社員であったため、早くから二人の恋愛事件を耳にしていたという。

6

北尾鎌之助「その前後の白蓮女史」(『婦人公論』1921.2)、野村法外「伊藤燐子問題 白蓮か莫蓮か」(『朝鮮公論』1921.1)など。

7

「絶縁状といふのは酷い」(『大阪毎日新聞』1911.10.26付、夕刊)。桜木路紅「白蓮の恋」春江堂、1921.11)にも同様の鉄五郎の発言が紹介されている。

8

北尾鎌之助(前掲6)

9

林真理子『白蓮れんれん』(中央公論社、1998.10)、井上洋子(前掲2)など。

10

宮崎露莖(前掲2)には、「白蓮直筆の絶縁状(ノート)の冒頭部分」が資料として収録されている。引用は、宮崎家に伝わるノートや、伊藤家から燐子に送り返されたという「絶縁状」そのものを元にしたと考えられる。

小説であった。同年7月まで5ヶ月に渡って連載されたこの物語は、同年12月の改造社からの刊行時に『則天武后』と改題されるように、則天武后をモデルとした伝記物語である<sup>3</sup>。事件の余波が収まらない中で、白蓮はなぜ、武后を描いたのであろうか。後述するように、ここには、武后を描きだすことを通した事件への応答を見出すことができる。

同時代の言説空間において白蓮事件を伝えることは、どのような意味を持つものであったのだろうか。また、白蓮自身による物語は、それらの言説群にどのように作用するものであったのか。事件の報道が内包していた問題の諸相を明らかにすることから、白蓮事件をめぐるメディアの言説配置について考察してみたい。

## 2. 事件の演出―「絶縁状」の位相

白蓮事件の衝撃は、何よりメディアを通じた絶縁宣言にあった。先述したように、燐子から伝右衛門へ送られた最後の手紙の全文は、1921年10月22日に発行された<sup>4</sup>『朝日新聞』夕刊紙上に掲載される。「絶縁状」の公開は、なぜ起こり、また何をもたらしたのか。まずは掲載の経緯と、その性質を確認してみたい。

当時の大阪朝日新聞社会部長であった原田譲二は、白蓮失踪を伝える記事の掲載を1日延ばすことと引き替えに「絶縁状」を受けとったことを回想記の中に記している。燐子逃亡の時間確保のために要請されたスクープ記事の延期は、速報性が何より重視される独占情報であったために当初退けたが、龍介の友人・赤松克麿によって説得され、その友情に打たれて了承したという<sup>5</sup>。公開が燐子の本意でなかったことは事件後の報道にも見られるが<sup>6</sup>、公開された「絶縁状」に他者の手が加わっていることに留意するとき、単なるアクシデントによって公開されたものではなかったであろうことも了解される。

公開された「絶縁状」への他者の介入は、「書留の書状は、世間に流動されてゐるものと、違ふともいへなければ、同一だともいひ兼ねる」<sup>7</sup>という、伝右衛門の妹婿であり柳原家とも血縁関係のあった伊藤鉄五郎の発言が報じられたり、伝右衛門とも燐子とも交流が深かったという大阪毎日新聞記者の北尾鎌之助が「伊藤氏に直接送られたものは、少なからず文意が異つてゐる」と報じたことなどによって<sup>8</sup>当初から話題となっていた。

今日明らかにされているのは、燐子の書いたものを下敷きに、龍介や赤松が書き直したということだが<sup>9</sup>、公開された「絶縁状」には、ある文脈の下に事件を位置付け、それに応じた読者の反応を期待する側面が見出される。

林真理子『白蓮れんれん』には、実際に伝右衛門の元に届けられたであろう燐子自身が書いた手紙の全文が引用されているが<sup>10</sup>、この内容と比較するとき、

メディア上に置かれる際に、事件がどのように意味づけられようとしていたのかが明らかになる。その特徴が最も顕著なのは、以下の部分である。

此の因襲的な結婚に私が屈従したのは私の周囲の結婚に対する無理解と、そして私の弱小の結果でございました(中略)不自然なる既往の生活を根本的に改善すべき時期に臨みました。即ち虚偽を去り真実に就く時が参りました。依つて此の手紙により私は金力を以て女性の人格的尊厳を無視する貴方に永久の袂別を告げます。私は私の個性の自由と尊貴を守り且つ培ふ為に貴方の許を離れます。長い間私を御養育下さつた御配慮に対しては厚く御礼を申し上げます。

伝右衛門との結婚は「因襲的な結婚」への「屈従」と意味づけられ、出奔は「金力」によって奪われた「女性の人格的尊厳」を回復するためであり、「個性の自由と尊貴を守り且つ培ふ為」の行為とされる<sup>11</sup>。ここに明らかなのは、事件を社会問題に昇華しようという意識であろう。「絶縁状」の宛先は、いわば世間ともいべき広範な読者であった。事実、膨大な投書が新聞社に寄せられるとともに<sup>12</sup>、数々の特集記事が組まれるなど、多くの返信もまたメディア上に送られた。

ではなぜメディアの介入は、「絶縁状」の内容を上記のものに変質させたのであろうか。ここには、すでに流通していた、伝右衛門と燐子をめぐる情報との関わりを捉える必要がある。

2人についての注目すべき報道は、事件以前に2度あった。1度目は、1911年2月22日に行われた結婚式の前後である。1911年2月20日から22日の『東京朝日新聞』朝刊には、「燐子と伝ねむ」という記事が掲載される。伯爵家の燐子を「燐子姫」と紹介するのに対して、伝右衛門の紹介は「石炭運の船頭」から成功したという経歴であった。「伝ねむ」という俗称が用いられていることが示すように、この記事内には階級格差が明確に刻まれようとしている。その上で、繰り返されるのは金銭の話題である。

「柳原家には結納として金二万円を贈り」、仲人や宮内省関係者へは「謝儀として金一万円を贈り、漸く此度の結婚御許可になれり」<sup>13</sup>と、結婚に際してかなりの額の金が動いたことが報じられる。その後、「金で買った結婚など云はれては、柳原家に対する大侮辱は勿論、この伝ねむの男が廃ります」<sup>14</sup>という「伝ねむ翁の直話」が置かれるが、本人談であるからこそ懐疑が深まるものであることは言うまでもない。「人間として何の取所もなき輩も唯二百万内外の財産を有する事に依つて、華族中の名門と縁組み得らるてふ事実を現実とせば天下の青年子女は何と思ふか」<sup>15</sup>という問いかけなど、財と階級との交換に対する揶揄はこの連載記事に通底するものであった。

その後、再び2人の結婚がメディア上で話題にされるのは、1917年の暮れから1918年春にかけて起きた筑豊疑獄事件がきっかけであった。福岡鉱務署長

11

林真理子(前掲9)中に示された、燐子オリジナルの手紙には、結婚について記され、「たまたま縁あつて貴方の所へ嫁す事に」なった、この手紙は「長く胸に畳んでみた事を一通り申しのべて貴方の最後のご理解を願ふ」ために送るものとのみ記されている。

12

『大阪朝日新聞』10月24日付夕刊(発行23日)には500通以上、『東京朝日新聞』10月31日の朝刊には400通以上の投書があったことが報告されている。事件直後から、多数の投書が紙上に掲載されている。

13

「燐子と伝ねむ」(『東京朝日新聞』1911.2.20朝刊)

14

「燐子と伝ねむ(続)」(『東京朝日新聞』1911.2.22朝刊)

15

「燐子と伝ねむ(続)」(『東京朝日新聞』1911.2.21朝刊)

であった野田勇のもとに、各炭鉱王から贈収賄が行われたとする嫌疑がかかり、夫人のもえ子と親しかった燐子もまた法廷に召喚された。証言に立った華やかな燐子の姿を報じた『大阪朝日新聞』は、その話題性に乗じて、1919年4月11日から21日まで全10回に渡って特集記事「筑紫の女王燐子」を掲載する。

特筆すべきなのは、すでに歌集『踏絵』（竹柏会、1915.3）を刊行し、戯曲「みどり丸」（『心の花』1918.4）を発表していた歌人白蓮が燐子であることが、初めて明らかにされたことである。ここでは、7年前の結婚報道が呼び起こされるとともに、「惨ましい人の腸を刺すやうな歌集」『踏絵』の中から感傷性の強い歌を紹介しながら、白蓮の境遇が想像的に語られている。書き手は、「女とて一度得たる憤り、媚に黄金に代へらるべきか」という歌の中に「傷ましい犠牲者」を見出し、「寂しさのありのすさびに唯ひとり狂乱を舞ふ冷たき部屋に」から「心境の寂莫」を感じとっている。それは「かゝるおもひかかる涙も女ゆゑ、やごとなき身のわが宿世ゆゑ」に表された「貴族の名門に生れたがため、思ふこともまゝにならぬといふ呪ひと悲しみの声」として了解された。

以上のような言説群を背後に、燐子の失踪は、「金力を以て女性の人格的尊厳を無視する貴方」からの逃避と意味づけられた。メディアの介入が引き起こしていたのは、「金力」による「釣り合わぬ結婚」がたどるであろう末路であった。すなわち、読者の期待の地平の先に、出来事の意味が創出されたのである。

### 3. 〈解放〉と〈目覚め〉—「絶縁状」の波紋

以上みてきたように、「絶縁状」のレトリックには、流通していた情報が形づくっていた期待の地平に応えようという意図を認めることができる。では、「絶縁状」は当時の言説空間にどのように作用したのであろうか。ここでは事件の磁場に集積していた言説の特徴を捉えてみよう。

「因習」による悲劇、「金力」による「人格的尊厳」の損傷。燐子の〈声〉を擬装したこの演出は、恋人・宮崎龍介の位置を如実に反映したものであった。そもそも、2人は大正デモクラシーの気運に引き寄せられるかのように出会っていた。

宮崎龍介は、辛亥革命の際に孫文を支援し、社会運動家として活躍した宮崎滔天の長男である。東京帝国大学法科に進学後の1918年12月に「新人会」を充足させていた龍介は、所属した弁論部の顧問である吉野作造と交流を深める。そうした中で「新人会」は、社会改革の理想を掲げた団体として成長していた。彼等は、亀戸のセルロイド工場の労働者と連帯して、社会主義思想を実践活動へと移していくのだが、この活動を理論的に支えたのは、吉野作造を中心に結成された「黎明会」であった。この「黎明会」の機関誌として誕生した『解放』に、白蓮の戯曲「指鬘外道」が掲載された(1919.12)ことが2人を出会わせる。「指鬘

外道」の出版をめぐって、『解放』の編集に携わっていた龍介が白蓮を訪れたのである。

新人会のメンバーであった龍介と赤松による「絶縁状」の演出は、その企図通りに、「因習」打破、資本家支配からの解放といった議論を触発するものとなった<sup>16</sup>。例えば、1921年11月の『婦人公論』誌上で組まれた特集「白蓮女史の絶縁事件」には、「個性の尊厳を自覚した女を金で買ひ取らうとする者は個性の冒涇者」であるという伝右衛門批判や<sup>17</sup>、「女子の人的自覚によつて、女子の人格を無視蹂躪する思想、制度、法律がその勢力を失墜すべきは疑ひもない」<sup>18</sup>といった、革命を求める熱を帯びた言葉が散見される。

さらに、1921年12月の『解放』誌上で組まれた特集「宮崎氏と白蓮夫人の事件」は、「絶縁状」の問題系が引き継がれたものとみてよい。中でも、麻生久「宮崎君と白蓮夫人の事件を顧みて」は、「現代日本の社会の多くの欠陥が燐子夫人によつて代表されて破綻を招いた」とし、次のように述べる。

現在の女の地位は実に弱い。燐子婦人にしても飛び出しても家には帰れない。それかと云つて自分には生活すべき金もない。自活すべき手段職業も知らない。(中略)宮崎君がそこに飛び込んだ。それで先づ安心して家出を決行した。全く巧利的である。だが此巧利的は彼女ばかりではない経済的独立なき現代の婦人の弱さであり止むを得ざる巧利である。

階級の問題に女性問題を関連づけた、マルクス主義フェミニズムの色彩を持つ議論に明らかのように、白蓮事件をめぐる報道の連鎖は、金力による支配からの〈解放〉という一つの文脈を生みだしていく。「絶縁状」の言葉は、それ以前に流通していた燐子・白蓮をめぐる情報を呼び込むとともに、同時代に流通していた問題系と響き合いながら、出来事の意味を形づくる。白蓮事件を語ることは、階級闘争からの〈解放〉を語ることに通じていた。

ここに同様の作用から引きおこされたものとして見逃せないのは、燐子の〈目覚め〉を見出していく情報の連鎖である。それは、「絶縁状」の次の言葉が引き起こした事態であったとみてよい。

貴方に仕へて居る多くの女性の中には貴方との間に単なる主従関係のみが存在するとは思はれないものもありました。貴方の家庭で主婦の実権を全く他の女性に奪はれて居た事もありました(中略)斯う云ふ状態に於て貴方と私との間に真の愛や理解のありやう筈がありませぬ(中略)私にはひとりの愛する人が与へられ、そして私はその愛によつて今復活しやうとしてするのであります。

こうした言葉が響き合うのは、白蓮自身の創作とその評価の文脈に集積していた言説群であったと考えることができる。先に見た「筑紫の女王燐子」の内容

16

井上洋子(前掲2)は、「絶縁状」の公開とその「演出」について、「人権擁護の視点から演出して公開」することを通して「姦通罪」の回避が目的であったと指摘している。

17

星野二郎「因襲的結婚生活の勇敢な反逆者」(『婦人公論』1921.11)。星野は龍介と同じ弁護士であった。

18

湯原元一「旧習慣旧風俗に対する女子の挑戦」(『婦人公論』1921.11)

を再び確認してみたい。この特集記事の冒頭に置かれていたのは、次の戯曲「みどり丸」の一節であった<sup>19</sup>。

あゝ私を恋慕ってくれるものは、雲の上の人でもなければ、国主の大名でもない、無位無官の白衣の人と、あの息の根の通はぬ冷たい人形と

ここでは、「著者の自叙伝ではないかと心ある人は淋しい憐れみの涙を抑へて之を詠めた」という一文が添えられている。明らかなのは、「傷ましい犠牲者」として「淋しい」生活を送る白蓮の姿を感傷的に伝えるとともに、「恋慕ってくれるもの」の存在可能性がスクャンダラスに伝えられていることであろう。

『踏絵』の恋歌は、恋人の存在とその元への出奔そのものを、期待の地平として築くものであった。記事に働くスクャンダラスな眼差しは、「百人の男の心破りなばこの悲しみも忘れはてむか」「吾なくばわが世もあらじ人もあらじまして身を焼く思ひもあらじ」といった歌を取り上げ、その背後の恋の存在を意識させる。その上で、現実と切り離されたあくまで「理想を追求」た結果としての恋歌と位置付けるが、スリリングなものであることを喜ぶ姿勢も隠されていない。「吾は知る百千の強き恋ゆゑに百千の敵は嬉しきものと」などといった恋愛謳歌の歌が詠まれ、その背徳性がメディア上で詮索されていたことを背後に見る時、「私にはひとりの愛する人が与へられ、そして私はその愛によつて今復活しやうとしてをるのであります」という「絶縁状」の言葉は、白蓮が自身の歌の境地に入り込んだことの宣言として了解されるだろう。

そして、こうした文脈の下に引き寄せられたのは、新たに登場していた恋愛論であった。新たな恋人の下へと走ったという道義性の問題は、折しも登場していた新しい「恋愛論」によって覆われることになる。1922年10月に改造社から刊行され、ベストセラーとなる厨川白村『近代の恋愛観』が、白蓮事件の当時、偶然にも『朝日新聞』紙上に連載されていた<sup>20</sup>。白村は、エレン・ケイ『婦人の道徳』のものとして「成規の結婚なしにですらも、恋愛は道徳的である。しかし恋愛なしには結婚は不道徳である」という一節を紹介し、結婚後の忍従を強いる従来の道徳的概念に疑問を投げかけていた<sup>21</sup>。

燐子の行動の是非は、白村の「恋愛論」やエレン・ケイの議論が参照されながら問われていく。「真の恋愛は人格と人格の結合」であるという白村の言葉を元に「当然の帰結」を迎えたとするもの<sup>22</sup>、エレン・ケイによる「結婚道徳」の提唱、「自由離婚」の成立に結び付けるものなど<sup>23</sup>、燐子を語ることは、新しい「恋愛」論への〈目覚め〉を語ることに通じていった。

こうした文脈の議論は、彼女を結婚へと追いやった柳原家にも批判の矛先を向けていく。内田魯庵は、「一見誰にも直ぐ不釣合であるのが認めらるゝ縁組みを、シカモ婚家から支度金を取つて嫁入らすききは常識を以つてしては殆ど其理由を解するに苦む」と述べ、「責任者は白蓮でなくて白蓮の実家の家長である」

20

1921年9月30日から1921年10月29日まで、平日の朝刊紙上に全20回に亘って連載された。

21

厨川白村「近代の恋愛観」(『朝日新聞』1921.10.13朝刊)

22

舟橋生「白村と白蓮」(『東京朝日新聞』1921.10.25朝刊)。白村自身も「近代の恋愛観」の連載終了後、「燐子問題に就いて 恋愛と結婚のこと(上)(下)」(1921.10.30、11.3朝刊)を掲載する。その中で、燐子の行動を「人間としての至高の道徳から見て、避くべからざる者」「人間としての自己を全うし、おのれの人格を保持する為には已むを得ない行動」と評価した。

23

麻生正蔵「愛の創造なき結婚生活」(『解放』1921.12)など。

と、兄で貴族院議員の柳原義光の責任を真正面から問うた<sup>24</sup>。新しい「恋愛論」との共鳴もまた、白蓮事件に因習的な結婚への挑戦としての意義を見出していったのである。

24

内田魯庵「客と語る」(『婦人之友』1921.12)

#### 4. 〈階級〉と病— 燐子批判の文脈

第一報が報じられた2日後の10月24日から4日間に渡って「絶縁状を読み燐子に与ふ」と題された伝右衛門の「手記」が、『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』朝刊(以下、両紙に掲載された記事の場合は単に『毎日新聞』と示す)に連載される。これは、大阪毎日新聞社記者であり、伊藤家とも白蓮とも親しく交流していた北尾鎌之助が、伝右衛門に行ったインタビューを「手記」形式に書きおこしたものであったという。親しい間柄にあったからこそ、燐子失踪を誤報であると見なして出遅れた毎日新聞社は<sup>25</sup>、伝右衛門側のスクープ記事を報じた。「非識字者」と報道されていた伝右衛門からの応答は、ねつ造も疑われるなど、他者の介入が予想されたものであった<sup>26</sup>。事件を巡る報道は、新人会のメンバーが所属していた朝日新聞社と毎日新聞社の報道合戦の様相を見せていく。燐子の「絶縁状」と同様に、メディアの介入による広範な読者への意識が、伝右衛門の〈声〉の内容の質を左右するものであったことは容易に了解されるだろう。この報道は白蓮批判の文脈に情報を与え、その磁場へと新たな言説を引き込んでいく。次にその特徴を確認してみよう。

25

伊藤家の天神別邸のすぐ側に住んでいた北尾鎌之助は燐子とも親密であり手紙のやりとりも頻繁に交わっていた。伝右衛門とともに燐子が上京した10月10日から20日の間にも連絡を取り合い、上京中に見会える約束もしていたため『朝日新聞』の報道を誤報と見なし、毎日新聞社の報道は出遅れていた。

26

以上、北尾鎌之助(前掲6)参照。

「燐子！」という呼びかけから始まる「手記」でまず語られていることは、伝右衛門にとっても結婚生活が「一生の中に最も苦しかった十年」であったことである。「押つけ」られたような結婚までの経緯、結婚当時のスキャンダル記事などが話題にされながら紹介されたのは、次の結婚式当日のエピソードであった。

式が終つて、自動車で、一緒に、旅館に引揚げて来た時、お前は、どうしたのか室の片隅でしく〜と泣いた、(中略)この涙は、自動車に乗る時、一平民たる俺が華族出の妻を後にして少しも尊敬せず、勞らず先へ乗つたといふことがお前の自尊心を傷け、そのために落す口惜し涙といふことが解つて、實際、これは大変な妻を貰つたと思つた、お前の雅号にしてゐる白蓮！お前はある人に、伊藤のやうな石炭掘りの妻にこそなれ伊藤の家のやうな沼田の中に居れ、我こそは、濁りに染まぬ白蓮といふ意味でつけたのだといふ、その自尊心、さういふ結婚式の第一日に見せられた、自尊心乃至持病のヒステリーは、此十年間、どの位、俺を苦しめたこととおもふ？！

伝右衛門の反論がどのような文脈を生みだしていたのかは、回が進むごとに明らかになっていく。第2回では、「お前が俺の家に来てから、第一に起つた

大きな出来事」として「おさきの問題」が話題にされるのだが、この内容が、燐子の「絶縁状」に示されていた「貴方に仕へて居る多くの女性」の中にある「主従関係のみが存在するとは思はれない」人物に、「家庭で主婦の実権を全く」「奪はれて居た」という出来事であることは容易に了解される。伝右衛門の言葉は燐子の訴えを、「お姫様育ちで主婦として何の経験も能力もない自分の事は棚に上げて」とそらし、「おさきに対する嫉妬的な狂人染みだ振舞ひは益々熾になつて止め度がなく」なつたなどと「ヒステリー」の文脈に問題を置いていく。さらには、「お前は平民の子を抱いて寝るといふことを死ぬよりつらひ屈辱だと云つて、声を挙げて泣いた」や「あの島(箱島)を買つて呉れと強請まれた時には全く二の句が告げなかつた」といった内容が、目立った大きな活字で示され、連載第3回でも同様の活字で「一箇月に五百円年に五千円までは小使として使つてよいといふことに許してあつた」という内容が示されている。すなわち、伝右衛門の反論は、燐子の自尊心の高さ、それに起因したヒステリーの症状、金銭感覚の欠如などに向けられたものなのである。こうした伝右衛門の発言は、事件をどのような意味づけの下に置いたのであろうか。

伝右衛門の発言の影響が顕著に見られるのは、「愛の問題号」とされた『婦人之友』の特集記事、「知識階級の男女は白蓮女子の離婚を何と観る」(1921.12)に収録された、頼資「白蓮夫婦と過ごした半日」である。ここでは、「平民の子を抱いて寝ないとまで云つた」という伝右衛門の言葉をなぞりながら、次のように述べられている。

お姫様は違つたものだといふ觀念から、相手にされなかつたその事が自分に少なからぬ不快の感を与へた(中略)女史は華族様としての「権威」をきづけまいとする跡があり〜と見られた(中略)初めその乱脈の甚しき(伊藤家の家系の複雑さ:引用者注)に驚いたと云つてある。併し自分に云はせると、それは偏に華族から平民に成り下つた時の驚きと期待の齟齬とに過ぎないと思ふ。

ここに明らかなのは、燐子の問題を「華族」という階級の属性として語っていることであろう。燐子の感じたという驚きもまた、階級間の齟齬として意味づけられている。この後、「華族といふ名目の下に、たとひ夫たりともその権限内に入るを許さなかつた」と続けられるように、燐子への批判は「華族階級」批判へと通じているのだ。

燐子側からの言説が資本金階級批判の色彩を帯びていたのに対して、伝右衛門の文脈からの言説は華族階級をスキャンダラスに取り上げる。燐子の出奔を正当化しようとした文脈をなぞりなおすかのように階級性が問題にされているのである。「燐子姫」に向けられた読者の関心に応じた出来事の演出もまた、メディアの介在が方向づけたものであつただろう。

さらに、「ヒステリー」だという情報は、例えば次のような言説へと接続されていく。

私は此の事件を最初から思想上の問題として取扱ひたくなかつたのです、あれは思想上の問題ではなく医学上の問題です。茲に吾々はヒステリーの最も鮮かな色彩を見せられてゐるのですよ。(中略)かういふ事件が起る毎に、本人がノーマルかアブノーマルかをも究めないで、道徳的批判が真先に飛び出すのは、日本人の頭が未だ科学的になつてゐない証拠ですネ。

(武庫精道「断髮白蓮の科学的批判」『女性』1922.5)

白蓮が断髮して尼になったと伝えられた時の記事である。白蓮事件が、「ヒステリー」という「医学上の問題」に起因したものと語られる。当時「本病ノ發生ニ就テハ、遺伝ハ最も有力ナル関係アルモノナリ」<sup>27</sup>とされていた「ヒステリー」を患った「華族」の「姫君」。ここに白蓮事件をめぐる報道が接近してしまった禁忌の存在が見えてくる。

27

駿河尚庸「ヒステリー」(『最新学校衛生学』吐鳳堂書店、1910.1)

## 5. 報道のタブーと残された問題

事件の後、白蓮事件をめぐる書籍は早くから刊行されていた。中でも、朝日新聞記者の手によるといわれている<sup>28</sup>八瀬不沼『恋の白蓮夫人』(時事出版社、1921.11)は、事件から1ヶ月にも満たない時期の刊行にも関わらず、300頁を超えた大著であるとともに、事件の経過を詳細に伝えている<sup>29</sup>。その中に1ヶ所、伏せ字になっている部分がある。

28

北尾謙之助(前掲6)

29

他に、桜木路紅『白蓮の恋』(春江堂出版、1921.11)。武田豊四郎『鬼城の白蓮』(上田屋書店、1923.6)など。

「同棲十年の良人を捨て、白蓮女史情人の許に走る」といふ馬鹿々々しい大活字の標題は、忽ちにして世の注目を惹いて、白蓮夫人を中心とする話題がそれからそれへと広がって行つた、○○○○にかゝり合ひのある柳原家といふことは一つの興味あるものであつた

白蓮事件の報道で、注意深く避けられていたのは、燐子が時の大正天皇のいここにあたることであつた。同書の中には「やむごとない血筋にも関係」といった表現は見られるが、今日の作家紹介文中に必ずといっていいほど示される、明治天皇の側室であつた二位の局が燐子の父の妹に当たること、つまり大正天皇がいとこにあたることは、限られた文脈においてしか話題にされなかつたのである<sup>30</sup>。

30

黒龍会による事件の糾弾(『燐子破倫問題 宮内官の広職と柳原伯の不臣』黒龍会本部、1922.2)の中には重要な情報として取り上げられ、燐子の兄義光の貴族院議員の引責辞任と、燐子の華族からの除籍が求められた。

大きな波紋を呼んだ伝右衛門の「手記」の連載は、4回で打ち止めになった。永畑道子によると、連載が3回目に及んだころ、「兄(伝右衛門)の話一切掲載見合わせを乞う」という電報が鉄五郎から北尾の許に届いたためであつたという。永畑は、以後、伝右衛門側からの釈明が一切なかつたことに対して、「菊の御紋

の内側への配慮」や「何らかの『圧力』が、そこにはたらいたのではないか」という周辺の人々の認識を伝えている<sup>31</sup>。事件発覚直後から、姦通罪で訴えることはないという、伝右衛門側の弁護士からの宣言があったことなどを見る時、時の天皇のいとこが投獄されるといった事態を避けるための力が働いていたと考えられよう。さらにこの頃大正天皇の病が進み、後の昭和天皇となる皇太子が摂政を務めていた。伝右衛門の発言とそれに触発された言説群が抵触しそうになっていたタブーを捉える時、メディア上での発言が打ち切られたという事態は、容易に想像されるだろう。

ここで留意したいのは最後の「手記」の公開となった第4回が、燐子の〈目覚め〉を大きく揺るがす噂の〈真相〉が語られたものであったことだ。燐子失踪を報じた『朝日新聞』紙上などには、伊藤家をめぐる2人の女性の存在が話題となっていた。それは最近、博多の花柳界から伊藤家に入ったという船子と、以前伊藤家にいたというおゆうであった。『毎日新聞』には、伝右衛門の「手記」と平行して4回に渡り、出奔以前の燐子が知人に送った手紙が掲載されていくのだが<sup>32</sup>、その第1回「燐子夫人の書簡の数々」（『毎日新聞』1921.10.23朝刊）の冒頭に置かれていたのは、次の手紙の一節であった。

……八年間の牢獄のやうな生活は、私の魂までも荒ませて終ひました、世の中を知らぬ親戚のために知らずへ犠牲となつたとは云へ、当家へ来るまではせめて、その人の無智を、愛の力とて掩ふのを一生の仕事としやうといふ、それは、美しい世の花嫁と同じやうな考へを持つてゐました、それがすっかり裏切られ、他の女を勧めた時ばかり主人の機嫌をとることを知るといふ、此事ばかりは、女大学にも、女学校の教へにもありませぬ。（中略）私は悪魔の涙に濡れてゐる女です。

「燐子夫人が二年以前、ある知己に宛てた私信」としてこの手紙の一節が取り上げられた背後にも、「他の女を勧め」て「主人の機嫌をとることを知る」という燐子の振る舞いへの関心があることがわかる。この疑惑に、伝右衛門の「手記」は応答する。

没くなつたおゆうの事も、初めはお前が寂しいといふから、お前の侍女として家へ入れたので、おゆうが家に来てからは、少しはお前のヒステリーも治つたやうだつた、年は若いけれどおゆうは伶俐な女で、よく、お前と私との間の調和をとつて呉れた（中略）今度の船子のことなども自分として、もう止したらといふのを、おゆうもゐないし、どうか私の話相手にしてと、頼むからお前のよいやうにさせたのだ、お前はそれを金力を持つて女を虐げるものだと云つてゐる、俺自身の考へではない、お前こそ同一人の女を犠牲として、虐げ泣かせ、心にもない、跪きをさせてゐるのではないか

「金力」の支配から〈解放〉されるべき存在であるという「絶縁状」の言葉や、「恋愛」「結婚道徳」への燐子の〈目覚め〉という評価を、伝右衛門のこの発言は強く打ち消すものとして働いていく。その後、事態の進行——滔天の友人である山本安夫宅での隠棲、離婚、柳原家への監禁、兄義光の貴族院議員の引責辞任、幽閉先での香織の誕生、庶子裁判、関東大震災の混乱の中で宮崎家に入る——はその都度報じられていく。そうした中であって、燐子のふるまいへの疑問と批判をぬぐうことができなかったのが、燐子の侍女という名目で伊藤家に入り若くして亡くなったおゆうと、燐子失踪の直前に根引きされていた船子の存在であった。

こうした言説空間に、事件後初めて、白蓮が発表したのが「鳳凰天に搏つ」であった。先にも述べたように、歌人として名を上げていた白蓮が復帰作に選んだのは中国史上唯一の女性皇帝となった武后をめぐる「伝記小説」である<sup>33</sup>。周知の通り武后は、唐の二代目皇帝太宗の後宮にはいり、太宗の死後、その息子で三代目皇帝高宗の皇后の座につき、その後、女性皇帝となってみずからの王朝である武周朝を開いた人物であった<sup>34</sup>。事件の余波が収まらない中で発表された物語の特質を、先行する言説群との相互作用に留意することから、次に検討してみたい。

33

この作品は井上洋子(前掲2)などにおいて白蓮の小説第一作とされているが、これ以前に1919年9月の『新小説』に発表された「養父」があり、管見の限りでは第二作である。

34

氣質澤保規『則天武后』(白帝社、1995.2)参照。なお、本稿では、白蓮の小説のタイトルに応じて、武則天ではなく、則天武后、武后という呼称を用いる。

## 6. 「鳳凰天に搏つ」の行為性

物語は、太宗の死後、尼寺で生活を送る<sup>しよく</sup>壘(則天武後の諱)の姿から書き起こされている。尼として先帝をしのびながら静かに日々を送ることが求められていたが、壘は「何だつてこんな所に来てしまつたのだらう」という呟きをもらす。ここで語り手は、「先帝太宗の才人(女官の役の名)であつたために帝の崩御の後」この寺に来たという事情とともに、次のように語る。

とは云へそも才人となるその初め、自分が好んで宮中に仕官を求めた訳ではなかつた。まだ十四であつた彼女は、親や親に代る我身の保護者達が、甘く娘が出世すれば、自然自分等も結構な事になるからといふ、我身勝手の都合から割り出された事であつたらしい。

周囲の算段による結婚と身の不幸。壘の位置が、事件をめぐる流通した燐子の情報に重なり合うことは容易に了解されるだろう<sup>35</sup>。このように、事件後に報道された、白蓮自身の問題を明らかに引き受けたとと思われる表現が物語内に散見されるのである。

この後、壘は尼寺を出て高宗に仕えることになるが、それは皇后自らの次のような思いによるものであった。

35

燐子にとって伝右衛門との結婚が2度目であったことはくり返し報じられた。1度目は燐子が数え13歳の時に子爵家の北大路随光の養女となった際に約束されていたものであり、3年後に北大路家資武の妻になった。燐子は16歳で一子をもうけた。小説第一作「養父」や、白蓮の自伝小説「荊棘の実」(新潮社、1928.9)はこの結婚の辛さを吐露したのとなっている。

誰ぞ新しいお人をお上の御側にこのわしから差上たなりや、あの珍らしいもの好きの御上ぢや、淑妃の事もつひ御忘れ遊ばさうもしれず、第一このわしへの思召もきつとよいに相違あるまいと思ふのぢやが……………

帝の寵愛が淑妃に集まっていることを、皇后は嘆いていた。そして、「敵に帝の寵愛を独占させて置くよりは、せめて身方の者へ迄なりと、それを取り戻す事が出来さへしたら、それだけでも既に〜大きな喜びだ」という思いから、墨を自分の侍女として、後宮に迎えるのである。

皇后の嘆きは、帝が「何につけても淑妃の事を一寸でも悪くいふ者があれば」、「御正体もなう御怒りになる」ことや、「淑妃の身方をして大勢の家来や誰彼の前をも容赦なく皇后を恥しめ」、「此上もない楽しみのようにしてゐる」ことによるものであることが表されていた。

ここに明らかなのは、メディアをにぎわせた伊藤家の女中頭であるおさきの存在と、それに苦しむ燐子の「私信」の内容との重なりである。「予てから何かにつけ、私のこといいふと、私の味方をしないことに定めてゐる夫」、「又私はいつ何時追ひ出すか知れぬといふ様子をその女の前で見せつけられやう」<sup>36</sup>という燐子の苦悩の〈声〉がここに響く。加えて、「他の女を勧めた時ばかり主人の機嫌をとることを知る」という描写には、燐子にとってのおゆうの存在と、皇后にとっての墨の存在が重なり合う。皇后・淑妃・墨の関係が、燐子・おさき・おゆうの関係に通じることが了解されるのだ<sup>37</sup>。すでに流通していた情報が、こうした読書行為を可能にしていたことは想像に難くない。

他の報道記事がそうであったように、メディア上に流通した情報にアクセスし、さらなる情報を加えていくといった構造をこの物語もまた備えていた。最も批判の強かった話題をあえて引き受けて描くこと。だがこれは、単なる自己弁護といったものに終始しない、スリリングな意味を結んでいく。

皇后の侍女に迎えられた後、側室へとその位置をずらすこと。これが外ならぬ白蓮によって描かれたものであることは留意すべきであろう。燐子に向けられた批判の多くが、その階級性に起因にすることであったことに改めて留意する時、侍女もまた華族社会の通例として同一の地平で批判されるものではなかっただろうか。唐をモデルにしているものの、「皇室」の制度が描かれていることに変わりはない。燐子の叔母である二位の局もまた、皇后の侍女から側室となった人物であったことは、周知の事実であった。すなわち自身に向けられた批判を正面から引き受けたこの物語は、同質の批判が華族社会の習慣そのものへと向けられるものであることを示し、ひいては白蓮報道の中でタブーとされていた領域、「やむごとなし」領域へと批判を投げかけるものとなっているのだ<sup>38</sup>。そして、時を同じくしたこの頃、後宮制度の廃止が検討されていたこともまた、偶然ではなかったであろう。

36

「燐子の書簡に現はれた悶えの跡(2)」「私は真実に生きたい」複雑な家庭の内情を訴へた涙の手紙(『大阪毎日新聞』1921.10.24朝刊)

37

井上洋子(前掲2)に同様の指摘がある。なお、「愛の受難を突破した問題の婦人 愛に甦れる白蓮婦人の昨今」『婦女界 恋愛・結婚受難号』1925.9)の中で、白蓮と太田静枝は次のような会話を交わしている。

太田「それではあの『女性改造』に出た「鳳凰天に搏つ」は、あなたのその頃の生活やお気持ちはずいぶん出てますね」  
白蓮「長いものには、何うしても自分が出るんですよ。あれも終りの方は駄目でしたの、追はれへて」

38

物語を通した宮中制度への批判は、「籠の鳥も同様」の一生を送った女の悲劇のエピソードが加えられていることから窺うことができる。

白蓮の筆が、支配階級批判に向かっていたことは、「鳳凰天に搏つ」の他の部分にも認められる。帝と皇后の行幸行列をみた群衆の、「貧しい家の暮しを助けるために、日ごと夜ごとに休みなく稼いで居るわたしの仕事は、みんなあゝいふ殿様たちの召料になるのだわ」という嘆きや、「今の役人たちは唯罪人をこしらへさへすりや役目に忠実だなどと云はれて、上役から賞められるもんだから。その賞め艸になる我々人民こそいゝ迷惑さ。」「口に云ひ度いまを云はせないお上のやり方は全く無茶だよ。」という〈声〉が描かれるなど、物語の後半にはあからさまな批判の言葉が表されていた。

白蓮事件は、同時代の様々な問題を触発し、その文脈の下においていった。それは、いわば、白蓮事件を語る言説そのものが媒体として機能したことを意味しているだろう。そして、「鳳凰天に搏つ」で行われていたのは、氾濫する情報の渦中に入り込みながら、情報を再文脈化することであった。白蓮は、この物語を発表する前年の11月に華族から除籍されている。香織が龍介の子であると証明されたことによって姦通の事実が明らかになったことを受けた処分であったが、華族からの除籍は、結婚に際して宮内省の許可を得る必要がなくなったことを意味していた。白蓮にとっては苦しいものであった「やごとなき身のわが宿世」からの解放でもあったのだ。

一連の出来事の後に綴られた武後の物語は、燐子／白蓮に向けられた様々な批判の言葉を引用し、反復することで、その意味を更新する。とりわけ華族階級批判を引き受けながら、その批判を不可侵の領域へと接続し、問題の核心に迫ろうとする姿勢が、武後の表象には認められた。白蓮事件をめぐる言説の動きが示していたのは、力を持ち得た言説の構造がなぞり直され、反復されることで意味が転換されていく様であっただろう。白蓮は、メディアによって力を与えられた言説によって悲傷した。しかし、その言説の力を反転させ新たな力へと変える動きを可能にしたのもまたメディアの働きであった。

\*本研究は日本学術振興会科学研究費(25770086)の助成を受けたものである。

